

月

佐々木 佳子 青森

赤鬼が泣きし童話を思ひけり鬼は人なり人は鬼なり
野良猫のマイケル見得を切る場所は玄関の前 どいてください
傷あとのやうに光れる二日月気づかぬほどがいいかもしれず
極寒の夜に貼りつく八日月ひとつのしくじりきり痛み
妖精はゐないと知つたころからだ月がわたしを追はなくなつた

ツグミ

上野 隆紘 千葉

シベリアに異変のありや渡りくるツグミの姿見ざるこの冬
今日こそはツグミ居るやと訪ふ園に群れて騒ぐはムクドリばかり
今日来るか明日はくるかと待つうちにツグミ見るなく如月に入る
ツグミらは芝生広場に散らばりて孤独に漁る群ることなく
日を追ひて数を増しくるツグミらは知己なき我の冬の友垣

瓶の惑星

大西 淳子*千葉

パンプスで駅方面へ走るわれ椿の監視カメラに視らる
はたらきの悪き臓器にはたらけとへビオフェルミンを送り込む日々
コマコマと餃子のギヤザー寄せながらたぐりたいのは遥かな銀河
チョコレート売場の甘き華やぎにうちなる若きおみな目覚めん
へキャベジン)の瓶に鎖ささるる惑星を飲めばふたたび灯るわたくし

昼の月

齋藤美衣 神奈川

足のゆび湯船に解いてけふ一日思ひ出せない文字をおもひぬ
すいはんき炊き上がるまへ両肩をぶるつと震はす霧中にありて
脱ぎすてたうすみづいろのワイシャツの裾は夜明けの稜線のやう
何度でも雪は降りきて地に落ちるまへにこの世をすこし照らせり
昼の月三番線のうへにありスーツのわれより存在感なく

みどり鮮し

岩崎佑太 東京

寒空をイトマキエイのひるがへりわれに来る自暴自棄の時間は
昼寝してゆふべあがなふ惣菜のさやいんげんのみどり鮮し
吠えやまぬ犬叱るときわがこゑはふとぶとと冬の肉体をもつ
『夢十夜』八、九、十夜読みかへす木枯らしが窓たたく今夜は
しらうめの園ゆきながらおもふかなわすれもの多き良寛上人

車椅子

小島静子 東京

それほどの大樹ならねど落葉つみあたたかさうなり櫛の木下
足だけで車椅子こぐを賞められぬほつつき歩きが趣味なりしわれ
せいいつぱい歩幅のばして漕ぎゆけば車椅子にもスピード感あり
ニュースにて見るのみの物価上昇を自販機に知るホーム暮らしは
朝粥にまじる緑は何ならん何にてもよし今日は七草

かなしみの奥へ

勝山和美*富山

コロナ禍のため同乗は叶わずに救急車を追い未明を走る
逝きし夜のつめたいベッドに横たわり母のみていた景色ながめる
かなしみの奥へと走るバスに乗りどこまでいこうか標なき道を
思い出の中だけに生きる母となり柩車はしずかに冬枯れをゆく
厳寒の二月の空は晴れわたり芽吹き春を信じていよう

疑問符

森田治生 三重

SAISONカード持たざるわれに日々届く「不審な利用が見つかりました」
出るとすぐ切れる電話はもしかしてルフィの手下がかけてゐるやも
セールの電話を厭ひ近ごろは（あんしん応答）機能にまかす
ワクチンを打つても発熱せぬわれの免疫力に疑問符の付く
有料とならば打つのをためらふか終りの見えぬコロナワクチン

鴉の羽

藤岡成子 兵庫

べらばうな電気料金請求書見つと思ふもウクライナの冬
ゆき雪ゆき小止みなく雪こんな日は君を偲びて書斎で過ごす
こんもりと雪のふとんをかぶりつつ休んでゐます畑の野菜
だしぬけに「ミリパール」といふ声聞こゆ百葉箱をながめてをれば
こころして見れば鴉の羽すてき十二単の姫のくろかみ

睦月の長府

宮本君子 広島

米寿なる師のこゑけふもやはらかくそのほほゑみのうつくしきかな
師の米寿祝ふ集ひぞうらうらと春の日差しのやうな会なり

三十年四十年はたちまちに過ぎて集ひぬ睦月の長府

露の臺顔のぞかせてゐるころか馬関海峡見下ろす庭に

梅見月小草生月さむけれどわたしの庭も春がのぞけり

ジュピターの光

北 祐二郎 佐賀

吹雪く夜もモデルハウスの灯はともり団欒の文字はたはた揺るる

裸木に咲きこぼれたる六つの花ささやくやうな空の声聞く

硝子戸を透きこぼれる冬陽本棚の下段の隅の歌集を照らす

短編の小説ひとつ読み終へて車窓に冬の海を見てゆく

ジュピターの光のしづく受けとむる銀器のやうな如月の月

まづはゆうるり

江頭洋子 長崎

戦時の子われはちびたるえんびつに補助棒つけてとことん使ふ

いつのまに消えたのだらう十の指紋わたくしといふ存在薄る

兄ちゃんと甘えし叔父のうつしゑは二十歳のままの軍服姿

にはとりを父がつぶして正月の馳走とせりき戦後の記憶

まだしばしわれに時間はあるとしてまづはゆうるり煎茶いたたく